

Title	ヨーシフ・ヴォロツキーの『修道院規則』・簡素版(II)：試訳(上)
Sub Title	Monastic rule of Iosif Volokaty brief rule (II)
Author	田辺, 三千広(Tanabe, Michihiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1985
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.54, No.2/3 (1985. 3) ,p.83(197)- 98(212)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19850300-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーレシフ・ヴォロツキーの 『修道院規則』・簡素版(II)

試訳(上)

田辺三千広

はしがき

本稿は、ヨーレシフ・ヴォロツキーの手になる『修道院規則』⁽¹⁾・簡素版の試訳である。原文は、「ヨーレシフ・ヴォロツキー書簡集」の付録として収められたものを用いた。

原文が典拠としたのは、一五一四年、ヴォロコラムスキイ修道院の修道士であったニル・ポレフによって写されたもので、サルトイコフ＝シチエドリン国立図書館、ソロヴェツコエ・コレクション三四六／三三六(以下「ПВ. Сол. と略記」)所蔵の写本である。『修道院規則』・簡素版が完全な形で含まれている写本がもう一つ存在する。それは、ПВ. ボゴデインスコエ・コレクション一一三五、№4、十七世紀半、(以下「ПВ. Погод. と略記」)である。原本の編者(「ヨーレシフ・ヴォロツキー書簡集の原本は、А・А・ジミーンと Я・С・ルリエーによって編纂された」)は、ПВ. Сол. を使用し、必要に応じ ПВ. Погод を引用したとして

ヨーレシフ・ヴォロツキーの『修道院規則』・簡素版(II)

(1) 『修道院規則』・簡素版についての文献学的解題とこれまで

なお、本文中の「」印の見出しは、原文中ではなく、筆者が文意を明瞭にするために加えたものである。

なお、本文中の「」印の見出しは、原文中ではなく、筆者が文意を明瞭にするために加えたものである。

の研究史については、以下を参照されたい。拙稿、「ヨーゼフ・ヴォロツキーの『修道院規則』・簡素版(1)」(史学 第五〇卷 記念号、一九八〇年 四七三~四八八頁)。

(2) Постановления Иосифа Волоцкого, М.-Л., 1959, стр. 296-319.

『修道院長ヨーゼフが彼の弟子に語った共住生活についての神の書かれた言葉』

第一章 『教会の祈禱について』

父なる神に栄光あれ

修道士達よ、我々は、とりわけ、共住生活において、すべてが礼儀正しく、しきたり通りになされ、教会の務めがあらゆる儀式に優先されるように、非常な努力と献身的行為を示す必要がある。そして、規則 *устав* の中に存在するものは、どんなものであれ、それが小さいものであろうが、大きいものであろうが、大小を問わず決して軽視されてはならない。また、聖なる父達から我々に文字で、あるいは、口頭で伝えられた不变・不可侵の教会の務めに關する儀式としきたりを守るために、あらゆる努力と献身的行為を示す必要がある。このため、規則の中に書かれたものが、長い時の経過により深い忘却の中に沈み、暗くなり、滅び、そして、完全に消えてしまうようないふうに、我々は、教会の務めについての儀式としきたりをいつも心の中に刻みつけ、それに新しい力を与えよう。たとえ、我々が書物に書かれているものを見たとしても、その書かれたものが日増しに崩れて

ゆき、そこに書かれていないものをとり入れたり、さらに、もし、それについて無頓着になり始め、怠惰と無気力のために神の教会の務めを不必要なものとするようになれば、報いの代わりに呪いを自らに持込むことになる。⁽²⁾ このため、とりわけ、鐘の音と共に、我々の手にもつておらず、すべての物を放り出し、非常な努力と熱意によって、避難所である神の美しい教会に向かうよう努めよう。それは、まさに、ペテロとヨハネが主の棺に向かつたようである。⁽³⁾ それは、まさに、ペテロとヨハネが主の棺に向かつたようである。そして、鐘の音が鳴り終り、歌の最初の一節が始まるのを待たないようにしよう。先に行けば多くの人々を待ち、空しく無駄に坐っていることになるだろう、と話したり考えたりしないようにしよう。大アタナシウスも言っている。天使は神の祭壇の前に立ち、無頗着な者と熱心な者を見ている。彼らは、恭しきをもつて来る者とそうでない者とを知り、誓いをたてた者、無駄話ををする者、労を惜しむ者というふうに印をつけている。聖エフレムも言っている。あなたが一つの良い言葉と、一步ごと善に向う時、贈物を得るであろう。また、あなたが一步ごと、怠惰な言葉と、悪に向う時、裁きの日にその答を得ることを知りなさい、と。兄弟(修道士)が鐘を鳴らす時、すくにとび起きて、一所けん命、注意深く、静かに教会に行き、神に手を差し挙げ、神の王座と恩寵を崇めよ。カモシカが檻から逃げるよう、鳥が網から逃げるようである。あなたの勤勉さと統一のとれた心を見る急け者は、自分の魂を目覚めさせる。そうすれば、あなたは神の口唇のように、無価値なものから価値あるものを生み出す人になる。

〔教会での祈りの時間に遅れないように〕

教会にやつて来て、待つている時、その中にいればいるだけ神から多くの恵みを与える。先に来る者は、主なる神から憐みも先に与えられる。というのは、もし、この世の皇帝のところに先に来て、いつも宮殿で立っているか坐っているかして、皇帝が現れるのを待つてゐる者、そして、落着き、ゆっくりしている者こそ皇帝に好かれる。もし、だれかが不注意にも、そして、軽蔑の心をもつて最後にやつて来るなら、そのような不注意で怠惰な者は皇帝の側近によつて斥けられる。そのように、我々も神の教会の掟について無頓着になり始め、最後にやつて来て、最初に帰つていくならば、そのような不心得な者は、神から斥けられる。

このため、修道士達よ、この世の全ゆる事、この世の心配事、怠惰、眠氣を退けた後、いつも、だれよりも早く走つて行くようにならつて、いつも最初に行き、待つていてることなく、その間なにかしらのことをおこなおう。行こうか行くまいか、とたまらつてゐる間に他の人々が先に集まつてくる。互いに、捕虜を捕えに行くように急ごう。もし、先に来るならば、その者はそれだけ多くの富を与える。そのように、ここでも、もし、先进るならば、その者は、それだけ天の富をより多く与えられる。

聖なる教父達は言つてゐる。もし、ある者が何か仕事をしてい、祈禱の時間が始つたのに自分が没頭している仕事を止めないなら、その者は悪魔によつてけがされている、と。この者をだました悪魔は、もし、人が神の仕事に努め、励むなら、そして、神の教会に先に来て、そこで祈り、神の言葉を聞くならば、小さ

な労苦によつて天の王国から遺産を受け取るということを知っているからである。その時には悪魔に汚された者は逆の考えをもつてゐる。すなわち、待て。そのうちにすべての修道士が集まり、歌が始まる。それから行けばよい。あることを先に行い、その後で教会に行くことが必要で都合のよいことがある、と。眠りはよから次へと祈りの時間を奪つていくことになり、それによつて神を怒らせる事になる。なぜなら、もし、最初に行わないなら、全ては斥けられ、恥をかかされるのは周知のことである。カインが最初は自分に、そして、次に神に供物をささげ、斥けられ、受け入れられなかつたように、今も、無価値なはかないこの世の事を初めに行い、そのため神の歌が始まつてゐるのに来ない者は、神から斥けられ、呪われる。それゆえ、我々は、初めにこの無頓着を退けよう。神の仕事を無頓着に行つての者は呪いを受ける。そして、償いを完全に行つことは難しい。このため、我々は、自ら努力し、自らに徳の法と戒律を定めよう。その徳とは、努力することであり、とりわけ、神の仕事の中に見い出されるべきものであり、多くの熱意をもつて靈的糧をうることである。ともかく、我々は、まず神へと歩みを向け、一步をふみ出そう。そうすれば、神は我々を見捨てず、我々に憐みを与え、自分の聖なる高所から助けを送られるだろう。なぜなら、神はこの世を愛し、我々が救われることを望んでおられるから。分別ある者は、その利益を享受し、怠惰な者はそれを奪われるのを周知のことである。まるで、共同食卓での甘い食事、街に放り投げられた黄金の

ように、だれか先に来れば、その先に来た者は満腹し、あるいは、金持ちになる。神の教会においては、神の言葉は蜜酒や蜂の子よりも甘く、金や銀よりもはるかに大金である。聖タビデによると、もし、だれかが先に来れば、その者は先に恩寵を受ける。怠惰で無頓着にも遅れて来る者は、恩寵には縁がない。そして、邪で怠惰な奴隸のように裁かれるであろうと。戦闘のラッパが鳴つて来る時、ぐすぐすせず、皇帝の前に来るのにだれよりも急ぎ、先に来る者だけが先に褒美を受け取る。ここでは、天の皇帝のラッパが鳴り、避難所である神の美しい教会に呼び集めている。このため、我々は、歌が始まるまで待つていたり、ぐすぐすするのではなく、喜んで務め、愛情をもって走つて行こう。先をあらそいお互いに走つていこう。熱心に励み、互いに我らの救世主イエス・キリストを讃美しよう。

〔教会の務めの途中で教会から出て行つてはいけない。〕

そんなふうに神の教会に来たならば、まるで神から与えられた力をもつて、まさに天にいるかのようになる。そして、肉体が礼儀正しい秩序を示すだけでなく、全ての精神が靈的な気持ちをもつて集中する。恨み言をささやくこともなく、人を愚弄することもなく、空しい言葉を言うこともせず、自分の手を固く握り、直立不動⁽⁸⁾で、目を閉じ、精神を集中しよう。自分の思考と心を天に置こう。そして、そこで涙と嘆声で神に憐みを請うている時、たいした用もないのに教会から出て行くようなことを決してしてはいけない。なぜなら、聖者伝の中で神の書は次のように言つてゐるから。神の教会で祈つていた主教アンモニエは、天使が祭壇の

右側に坐つていて、教会に入つて来る者の名前をその時紙に書いたのを見た。そして、なまけて教会から出て行く者の名前を消したものを見た。その名前の者達は十三日後に死んだと。聖ドロテア⁽⁹⁾も自分の著作の中で、同様に、熱心に正氣で務めをしている修道士に褒美を与える天使について語つてゐる。聖エウロギエは、徹夜禱⁽¹⁰⁾で熱心に務めている修道士たちに天使が褒美を与えるのを見たが、その時、天使は、ある者には我らの主イエス・キリストの像を刻んだ金貨を与え、ある者には十字架を刻んだ銀貨を与え、ある者には銅貨を、ある者には聖餅を与え、そして、ある者には何も与えず、その上ある者はもつているものを教会に置き、手ぶらで教会から出ていった。そして、主の天使から彼は次のように打ち明けられた。褒美を得た者は徹夜禱で祈りと祈願と讃美歌に努め、朗読に熱心であつた者である。一方、何も得られず、手ぶらで出て行つた者は、自らの救いを軽んじ、虚栄と日々のうわざのとりこになり、徹夜禱で無意味に、怠惰に立ち、恨み言をささやき、愚弄している者達である、と。修道士達よ、このことを知るなら、祈りが終る前に教会から出て行つてはいけない。さもないと、神の書が証言してゐるように、おしゃべりやささやきから悪魔が我々を騙そうとするだろう。聖ヨアン・レストヴィチニ⁽¹¹⁾は次のように言つてゐる。ある者は悪魔から教会でおしゃべりをするように強いられ、ある者は笑つたり、ささやいたりすることを強いられ、また、ある者は祈りが終る前に出て行くことを強いられている、と。聖ベネディクト⁽¹²⁾はこのことの証人である。彼の修道院に祈禱の途中で出て行こうとする修道士がいた。聖人は、神

にその修道士を祈禱から連れ出そうとする者を示すようにと祈つた。そして、黒人の姿をした悪魔がその修道士の衣服をもち、教会の外へ引っぱっているのを見た。聖ベネディクトは彼を杖で打つて、そのようにして彼が出て行くのをとめた。⁽¹³⁾ そして、神の書の中にこのような話が多数ある。

父と修道士達よ、我々は聖なる務めに励もう。まず、外面的な礼儀正しさと上品さを心がけよう。次に、内面的な節制と用心に努めよう。そして、神への歌と讃美にいつも真先に向かい、それが終る前にそこから出て行かないようにしよう。神の恩寵の代わりに、神の怒りを受けないように恨み言をささやいたり、愚弄し合わないようにしよう。聖なる務めは特に望ましいものであり、全ての務めよりも大切なものである。聖ズラタウストも説き語つている。だれも熱意を失わないように。だれも空しく、はかないことを言つたり、考えたりしないように。そして、全ゆるこの世のことを心から追い出し、姿勢を天の方に向け、分別をもち、勇氣をもつて主なるキリストに仕えるように、と。射手が、もし、上手に矢を放とうとするなら、まず、自分の足場に注意を払い、標的に対し慎重に狙いをつけ、注意深く矢を放つ。それと同じよう、あなたがする賢い悪魔の頭を打とうとするならば、まず、心を平静にし、次に、心を堅固にするように気を配るがよい。

〔教会内の務めについて〕

我々に求められる大切なものは何か。それは、多くの恐畏の念をともなう静かな上品さであり、高められた精神と自制心で飾られた上品さである。次に、心の状態は、姿勢の良いこと、手の正

しい使い方、柔軟で安らかな声といったような目に見える形で示すことである。主は静かで柔軟なことを愛される。次のように言われている。私は、だれに目を向けるかといえば、柔軟な者、無口な者、私の言葉に恐れおののく者にである⁽¹⁵⁾。ある者が地上の皇帝に語る時、彼は皇帝にどれ程多くの恭しさを示すか全ゆる形でそれを巧みに行う。このため、頭を下げ、両手を組み、足を合わせ、平身低頭して、皇帝が望むことのみに返事をする。それに反して、もし、他の何かを勝手にあえて請い願うならば、最期的な罰を受けるだろう。天の皇帝の前に立つており、そのそばで天使が震えながら立っているのに、天の皇帝に対し信心の話を止め、あなたは泥や埃やくもの巣について話をするのか。その侮辱について裁判がなされる時、あなたはどうして我慢できるよう。恐れも震えもしないのか。不信心者よ。まさに、ここに天と地上の皇帝が目には見えないが立つており、各人の分別が試され、各人の知識が調べられ、天使が畏敬の念をもつて彼の前に立っているということをあなたは考えないのか。そうではなく、あなたはそのことが分らず、こんな風に無頓着で怠惰な状態で何について会話し、何について返事をするというのか。自分のことを何も知らずにいるのだ。不幸で忌わしいことよ、市場で聞いたことを教会で話し、みだらな大声をばらまき、畏敬の念をもたなければならぬ時間に無益なことを語り、空しいことを考え、怠惰にもあくびをし、不心得にも自分のことだけを考えていることをあなたは恐れないのか。悪魔は、無人の家に入るよう、恐れることもなく、すぐにやってくる。もし、分別と畏敬の念をもつ

者が立っているのを見るなら、そして、天から垂れ下っているように姿勢を伸し、精神が高まり、目から真の涙を流している者を見るなら、敵はあえてそちらを顧みようとはしないだろう。

このため、予言者は次のように言っている。主よ、私はあなたを深みから呼んできた。心の底からどれほど熱心に、傷ついた心と、抑制された気持をもって語り、祈ったかを見て下さい、と。その祈りは天に昇る。水が平坦な土地を流れる時、高い方へは上

つていかない。水が流れるのを止め、集まり、押しつめられる時、いちばん速い流れとなって高い方へ押し上げられる。人間の心もうとうである。自分について恐れを知らず、無頓着でいる間、多くのことが不節制になり、それが増大していく。みじめなことやみじめな心配に打ち克ち、より強く圧縮され、強くなつた時、純粹な力強い祈りは高所に押し上げられていく。このため、予言者は主に言っている。私が嘆き呼んだ時、私の願いは開き入れられた、涙から来る神の恩寵を引き寄せることができるからである。雲の流れが大気を陰うつなものとし、水滴をしばしば落し、雨が降つた後、全ての場所は静かで明るくなる。そのように、悲しみが心中にある間、我々の心は曇る。言葉による祈りと、それに伴う涙によって洗い流される時、この世の空しく、誘惑的な会話から離れていき、神の守護により、心の中に多くの明るさが注ぎ込む、ちょうど、ある光が祈っている者の心の中に神から送られたかのように。そして、燭台の光のように祈りの光が必要である。もし、

あなたが用心深く祈ることを学ぶなら、仲間に教えを求めなくては、つまり、正しい教えを照らす仲介者がなくとも、あなた自身の中には神がおられるのだ。このため、至る所から正しい教えを集め、自分の心を集中すべき祈りの時に怠惰な気持と不注意を追払い、この世の全ゆる朽果てるものをその心から追払おう。この世の朽果てるような空しいことに煩わされないために。

〔教会内でおしゃべりをしないこと〕

もし、ある者が、我々は物について処分されず、我々の生活にとって必要なものを折り悪しくもつてているものだ、と言つたとしても、そのようなことは決して（神の書の中で）語られてはいない。^[16] それは悪魔の如き口実であり、悪魔の誘惑であり、空しい言葉である。たとえ、我々が自分の生活について処分しなければならない必要なことが多くあるとしても、それをかたづけるための余分の時間があるだろう。もし、教会でそのようなことを話すのならば、主を怒らせないためにも、来ない方が良い。そして、もし、そのような者が来て、徒らに務めを行なうなら、呪われた者よ、神にとつて呪わしく、不純である。なぜなら、神の教会は、盜賊の巣窟とされるから。我々は一致して良き秩序について配慮しよう。そして、できる限り、我々は我々の救いの妨げとなる者を黙らせ、彼らを聖なる教会の囲いから追放しよう。なぜなら、我らの主イエス・キリストは、そのような者を杖をとつて追放されるから。そして、たとえ、人々が侮辱し、非難し、また、ある者がより激しい口調で語つても、友よ、眞の道を示すことを止めてはいけない。もし、心を煩っている人を理性によつて治そうとし、

多くの困難に耐え、退くことがないなら、修道士達よ、我々はな
おそれら自分の心の救いのために、多くの悲しみや不幸に耐え、
それらを克服することがふさわしいのではないか。何度も病人が
医者の衣服を引裂き、医者を侮辱し、謗り、⁽¹⁸⁾ 医者に唾を吐きかけ
たにもかかわらず、医者はその惡々しさを怒ることなく、その病
人に腹をたてず、氣にも留めず、ただ、病人が健康になるのを見
ることだけを望んだ。肉体に関しては一所けん命に配慮するの
に、心に関しては滅びる人の魂に気を配らないとは何と変なこと
か。たとえ、その時ある者が憤慨するとしても、あなたに何も害
を与えることはできないし、その後であなたには恵みが与えられ
るであろう。たとえ、彼があなたの手に負えない者となるとして
も、神はあなたの友となるであろう。なぜならそのようにする時、
我々は仲間の修道士を救い、不心得者に対する憐みを自らに得、
神に向う多くの勇気を得、自分のことを祈る者より、多くの報酬
を得るから。自分のことを祈る者は、自分一人を助ける。一方、
不心得者を黙らせた者は多くの者を助ける。畏敬の念をもつて主
の前に立とうとする者、謙遜の心をもつて主に仕えようとする者
は、利益も先になり、秩序を乱そうとする者は後になる。このよ
うに、利益を二倍受けるため、秩序正しい全ての人々が王冠を与
えた眞の君主を我々の心中にもとう。

このことを聖ヨアン・ズラタウストは教え、教訓している。我

々はできる限り畏敬の念と愛をもつてこの務めを決して無視しな
いようすべきである。そして、もし、勤勉をもつてこの伝え
られた規則と戒律を守るならば、この世で生きた眞の神に仕え、

あの世で聖人達と共に太陽のように光り輝き始めるその日を待つ
肉体と精神の健康が我々に与えられ、苦しみとなるものは何もな
く、我々の主であるイエス・キリストの名において天の王国の樂
しみを受け取るということを良く知るであろう。彼の榮光が永遠
であれ。

註

(1) 教会の務め *Перковная служба* とは、おもに教会での礼
拝を意味する。

(2) この部分は、ヨーシフの思想の基本的性格をなす一つであると考えられる。ジユマーキンの見解を参考意見として挙げても、それは、彼の見解が筆者未見の『修道院規則』・拡大版によっているゆえである。ジユマーキンは、おおむね以下のよう述べている。ヨーシフのすべての見解の中で一つの共通した特色が明確に表われている。それは、教会の権威への恭順である。彼は無条件に教会の全古文献の真実性を確信している。そして、これらに対する批判的研究や多少の自由な立場の思想を認めなかつた。ヨーシフにとって、何らかの考えが、「神の書」に基づくことなしに語られること、また、それ以外のものに基づく考え方の表明は、人をまげ、結果的に滅すことを意味した。(В.И.Жмакин, Митрополит Даниил и его сочинения, М.
1881, стр. 20-22.)

(3) ハネ伝 一〇一三

(4) アタナシウス(一九〇頃—三七三)アレクサンダリア大
主教。三位一体説を唱え、アリウス派と論争したことでも有名。
(5) エフレム・シリン(三七三没)。シリアの聖書註解者、著

作家。

(6) 修道士の話し方、歩き方について述べてある。

(7) 劍世記 四一五

(8) この部分は、「肉体的緊張」と「精神的緊張」の相互の依存関係について述べられており、マーシフのこう「秩序」を表すものとされる。(G. P. Fedotov, *The Russian Religious Mind*, vol 2, Harvard, 1966, p. 312)。

(9) メロテト (|||〇|||腰肢)。カッペルキアのカエサリアで生まれた娘。ローマ皇帝ティオクレチアヌスの迫害により殉教。

(10) 徹夜禱 *бдение всенощное*。聖務において、一日の礼拝は夜から始まり、徹夜で続けられた。

(11) ハネス・クリマクス (六四九頃没) のこと。シナイ山に

ある修道院の院長。『天国へのはし』の著者。

(12) ベネディクトゥス (四八〇頃—五一四) のこと。ベネディクト会則起草者。

(13) ノの話は、Gregorii Magni Dialogi Libri IV, Liber II, cap. IV. を参照。この部分は、「修道院規則」・拡大版と共に述べられる。拡大版との違い、フランス語では、このベネディクトの例は、「修道院規則」の懲罰的性格を表わしているとする。

述べてある (И. Хруцов, *Исследование о сочинениях Иосифа Санина*, СПб., 1868, стр. 77)。

(14) ハネス・クリマクス (三四七頃—四五〇) のこと。ヒュスタンチノープル主教。説教が巧みであったことから黄金の口 (ローマ語で、ズラタウベト) とあだ名された。

(15) Пандектъ Антоха по сп. XI в. Воскресенского Новоиерусалимского монастыря. л. 224 (筆者未観)。

(16) ルリマー・アルモジ、「食の戒」には、規則を守らぬ違反者

ではなく、マーハーハとして危険な敵対者、いや、異端者やわれらをもててこむ (Я. С. Лурье, *Краткая редакция „Устава“ Иосифа Волкого—памятник идеологии раннего иосифлянства*), ТОДРЛ, Т. XII, 1956, стр. 127)。

(17) 日本 P.B. Col. など、この部分は欠落している。

(18) 註16と同様、ルリエーは、この「病人」を、マーシフの危険な敵対者、つまり、異端者と考えてゐる。この部分を、ルリエーは、この「修道院規則」・簡素版が異端者 (ノガロロモスクワ異端) に対する書かれた修道院改革のプログラムであるとする自説の論拠の一としている (Я. С. Лурье, *Краткая редакция* стр. 127, 129)。

第十一章 《食物と飲物についての 神の書からの話》

教会の務めについて語ったように、「我々は、大きな努力と注意と畏敬の念をもつて神の教会で振舞い、我々のしきたりについて配慮しなければならない。食物と飲物についても同様であり、簡素で適度なものを選ばねばならない。⁽¹⁾ 盗み食いを慎み、だれかし、あるいは内緒で決して食べてはいけない。全ての惡はここから生じる。そして、これは、何でもないと思わせ、実はその中に毒薬が隠れている悪魔の種播きである。⁽²⁾ 大バシリオスも言つてゐる。もし、胃袋の食欲を抑えられれば、天国へ入ることができるであろう。もし、抑えられないなら、死の苦しみとなるう、といふ。あるいは、胃袋の食欲を慎め。もし、食べたいと思う欲望に少しでも敗けるなら、あなたの胃袋に激しい苦しみが引き込ま

れ、あなたを簡単に殺してしまうであろう、と。私は、多くの人々が欲望をもち、その後、悔改めるを見た。盗み食いをする者や大食漢の一人は、それを止めず、また、悔改めず、節度ある生活から離れ、この世で自らを滅し、あるいは、節度ある人々から離れようとしたのを見た。そして、悪魔が甘い欲望によって助け、形の上では救われた人々の中にいるが、実際には滅びた人々の中にいるのを見た。

パコミオスの弟子、聖テオドロスの伝記の中でも次のように書かれている。ある日、フヨードル彼は修道士達に語って次のように言った。修道士がいつものように断食をしていた時、悪魔がやつて來た。そして、一人の修道士が飢え、疲れ果てているのを見た。彼に良からぬ考えを吹き込み、突腹を駆立てた。——人間の欲望が悪魔とくつき、人間に害を与えるのは常である。——そして、すぐに、彼にパンを盗ませ、ひそかに食べさせた。今も、その修道士達の中に誓いの違反者となつた盜人がいる、と。新神学者・聖シメオン⁽⁵⁾は言つてゐる。我が修道士達よ、たとえ、我々が多くの欲望を抑えても、私が言つてゐるように、肉体的に身がらわしいものをもつなら、最悪のものに支配されることになり、我々には何も益はない。嫉妬、怒り、盗み、全ての身がらわしいものを拒否し、怠惰、落胆、偽り、不服従、不平、多量の飲酒を退けるとしても、修道院長の指示なしに、パンや他のものを黙つて食べるならば、我々にいかなる益もない、と。さらに、ローマ教皇、聖グレゴリウスは言つてゐる。ガラチアと呼ばれる修道院に全ての人々から偉大な聖人と考へられていた修道士がいた。彼は

病気になり、全ての修道士達は彼のところに集まり、そのような聖人から何かりっぱな話を聞くことを願つた。彼は、涙を流し、魂が体から抜け出すことを余儀なくされる程震えながら、次のように言つた。あなたがたは、私があなたがたと一緒に断食をしてゐると信じていた。しかし、私はあなたがたに内緒でものを食べた。さて、そのためには、蛇の餌にされた。その蛇は、私の両足と両膝をじゅうぱで縛り、自分の頭を私の喉に押込んだ。そして、蛇は私の魂を暗くして苦しめてゐる。こう言つて彼は死んだ。我々の救いのために、神がこのことを語ることを選んだと思われる。なぜなら、彼は敵から逃げられず、敵に身を委ねたからである、と。聖ニーレコン⁽⁶⁾は、同じようなことを彼の書簡の中で書いてゐる。ある長老が修道院を建て、修道士を集め、神に乞い願つた。そして、彼の死んだ弟子達に会えるようにと彼らのことを祈つた。彼の死んだ弟子のうちの二人が恐ろしい地の国にいるのを見た。彼の死んだ弟子の二人が恐ろしい地の国にいるのを見て、それについて尋ねた。その一人が、私は告白もできないようある思いをもつてゐた。そのためここに送られた、と答えた。もう一人の修道士は、大食が私を滅したと語つた。

我々は、だれ一人としてそのようなことを考へる者がいてはいけないといふことで話を聞いて來た。すなわち、もし、だれかがこれ（大食）について思い煩わないなら、いかなる徳も役には立たず、そればかりか、より一層強く苦しめられる。そして、注意を払わなければ完全に滅びの仲間に入り、今も苦しめられる。そのため、満腹を慎み、地獄の恐怖に心を集め、天の王国に思いを馳せることが、我々の最初の修業である。それは、地獄の火に恐

れをなし、天の王国の美しさに満足するためである。あらゆるものの中で、最悪の欲望、つまり、暴飲暴食という全ゆる惡への根源を断ちろう。必要な生活の糧を我々は禁じていいのではない。

あらゆる惡の張本人であり、淫蕩の根、つまり、惡魔の如き習慣である暴飲暴食を追い払おう。しかし、大食の惡魔を追い払うこと

とは容易でない。このため、これについて思慮を重ね、分別を重ねよう。もし、我々が少しでも配慮するなら、その時、主が我々を助け、生命を与える聖靈の恩恵によって、我々の胃袋に空腹の苦しみを与えるよくなことはなされないだろう。アーメン。

註

(1) 本章は、拡大版の『修道院規則』と大きく内容が異なること

が指摘されている。簡素版では全く言及されていないが、拡大版では、すべての修道士が平等に食物・飲物をとった訳ではなかった。「三階層」制度がとられ、その各々の階層の食事の内容が異つた（Я. С. Лурье, «Краткая редакция» стр. 120, И. У. Буловник, Монастыри на Руси и борьба с ними крестьян в XIV-XVI вв., М., 1966, стр. 244-5. 他）。

(2) マタイ(13—13七~13九)

(3) 大バシリオス(1310頃—13七九)。カツペドキアのカエサリアの生まれ。共住制修道院の創始者。

(4) テオドロス(13六八没)。共住生活の形態を初めてとり入れ、エジプトのテベに修道院を建てたパコミオス(11九二頃—11四六)の弟子。

(5) 聖シメオン(九四九—10111)。ビザンツの修道士、神

秘主義者、著作家。神秘神学を確立したことから、「新神学者」と呼ばれる。

(6) ニーコン・チエルノゴレン。十一世紀のアンチオキアの修道士。

第三章 《共同食卓(трапеза)で話をすべきでないことについて》

共同食卓においては、いかなる人も聖なる書物の朗読を除き、語葉をいつさらかけないように多大の配慮を払う必要がある。必要な時、修道院長が共同食卓でただ必要なことだけを話すべきであり、それも慈愛と敬虔さをこめてである。聖なる教父達は、これまでについて、聖なる祭壇も食事のさいの修道士の共同食卓も同じであると語っている。

聖者伝の中に次のように書かれている。ある長老は言った。ある時、私は師父ヨアン・コロフと一緒に坐った。他の長老達も彼と一緒に食事をしており、一人の長老が一度目に話しかけた時、師父ヨアンは黙っていた。その長老が二度目に話しかけた時も黙っていた。三度目に話しかけた時、師父ヨアンは、彼に言った。「父よ、あなたがこの共同食卓に坐った時、私から神を奪い、おじやべりが始まってしまいました」と。そして、立ちあがり、籠をとり、仕事を始めた。その長老も悲しみ、そこを離れた。そこで、私は師父ヨアンに尋ねた。「父よ、なぜ、あの長老をしかったのか。あの人は悲しんで出て行つたではありませんか」と。彼は私に言った。「神を怒らせることがなく、また、聖なる天使達を悲しませないことが多くのことの中でも最良、最善のことであり、とてもふさ

わしいことであり、益のあることです。皇帝の前で私は語つて
もおじけもしなかつた、と書かれている。もし、我々が唯一の神
を尊敬するなら、全ての人々は我々を尊敬するでしょう。もし、
神である唯一の人「キリスト」を軽蔑するなら、全ての人々は我

々を軽蔑し、我々は滅びに至るでしょう。なぜなら、唯一の神を
尊敬する人は、多くの人々の中にも恐れることはない。多く

の人々が神を恐れているから。修道士が共同食卓で話を聞いていて
は、豚も猫も追い払うことができない。なぜなら、豚が食べてい
ては人々を鎮まらせることができず、猫が食べていては給仕もで
きないからです。⁽¹⁾私は、その長老のところに行き、身を投げ出し
て謝れば私を許してくれ、彼は喜ぶことでしょう。そして、その
後、私は静かに坐っています。あなたも心を痛めず自分の僧房に
帰りなさい」と。

さらに、小修道院(скитъ)の修院長、師父イサークは次のように
に語ったといわれている。「共同食卓に坐わり、心中で祈らず、
おしゃべりをしている修道士は、肉体的には修道士のようである
が、靈的には修道士ではない。共同食卓で笑い、空しい言葉を語
り、食物について不平を言う者は、神から離れ、神が彼から離れ
ているのである。そして、彼の祈りは受け入れられず、彼の仕事
は有益なものとはならない」と。

第四章 《衣服と履物についての 聖なる書物からの話》

我々が食物と飲物について話したように、素朴で分を過さないも
のを選ぶことが必要であるし、全てのことと父(指導神父)の
忠告に従つて行うことがよい。食物について語ったのと同じよう
に、必要最少限の衣服を場所やそこにいる人々に合わせて着用
し、しかも、できるだけ質素で粗末な衣服をもつことがよい。⁽¹⁾悪
魔の老猾さにまどわされ高価で余分な衣服を求める方がよい。

第七回聖全地公会の諸規定も次のように述べている。主教や修
道士や下級聖職者が、美しく、派手な衣服で身を飾るようなこと
は非難されて当然である。もし、彼らがそのような状態にあるな
ら、教会の懲罰が与えられる。もし、誰かが、粗末な衣服をまと
つている者を笑うなら、懲罰により改められるだろう。昔から、
全ての修道士や聖職者は控え目で粗末な衣服を着て生活してきた
と。聖ピョートルは、自分の弟子クリメントに言っている。クリ
メントよ、おまえは、私が一片のパンとオリーブの実と粗末な青
物を食べ、私の法衣がこの古びた衣服であり、他の衣服を必要と
していないという私の生活を理解しなかった。私の心はあの世の
(1) プドヴニツィによると、猫と豚の例は、「修道院規則」が教
会での秩序の遵守と外面向的な儀式について詳しく論じられてい
ない。ズラタウストの伝記の中でも言われている。彼がコン

на Руси, стр. 85).

スタンチンの都市の総主教座に就いた後、彼の食事は臼でついた大麦をふるつたものであった。そして、それを一日中水につけ、正しい秤で測られたものを食べた。彼の衣服は獸の皮のボロであり、着替用に三枚目の衣服をもつていなかつたと。聖グレゴリー・ボゴスロフ⁽³⁾は、大バシリオスについて語つている。大バシリオスは、ある主教に語つた。私は掠奪を恐れない。なぜなら、たとえあなたが要求しても、毛皮のボロの衣服以外、私は何ももつてはいないのだから、と。師父イサイア⁽⁴⁾は言つた。あなたは衣服を誇つてはいけない。エリヤの羊の外套とイザヤの粗末な服とラクダの毛でできた洗礼者ヨハネの服を想い起し、忘れてはいけないと。大アルセニーについても次のように書かれている。彼は在俗中、誰れよりも華やかな衣服をもつていた。しかし、彼が修道士になつた時、彼は誰れよりもみすぼらしい衣服をもつていたと。大サーヴィア⁽⁵⁾も、皇始のところへやつて来た時、乞食と間違えられて宮廷から追い出された。なぜなら、彼は、古くてつぎはぎだけの服を身に着けていたからである。

聖なる教父達も、贅沢な食事や装飾は聖職者や修道士の姿には無縁なものであると言つている。このため、昔から、全ての聖人達は、羊の皮や山羊皮を身に着けて歩き回り、とられればとられっぱなしで、相手を憐み、自分は傷つけられたままでいた。なぜなら、彼らにとって、この世の全てのものは価値なきものであつたから。それ故、世俗の生活では、人は衣服で我が身を飾れば人々から賞賛を受けるが、修道生活では、控え目でより粗末な衣服をもつことにより、天に自分への賞賛を準備しているのである。

師父イサクも、修道士達に言つた。我々の父達は、つぎのあつた古い服を着ていた。今、あなた方は、高価な服を着ている。これから出ていきなさい。なぜなら、あなた方は、この場所を墮落させたからです、と。聖エフレムも衣服について語つている。華やかな衣服を好むそのような者は、神の服を欠いているという点では裸である。そして、我々が衣服を良くしようと思を配ることは、天の王国に全く何ももたないことを意味し、我々の衣服の美しさは、天の王国の栄光を欠いているという点では裸であるという証しである。そして、さらに言つてはいる。主は十字架の上であなたのために侮辱を受けられた。罪深い者よ、それなのにあなたは華美な服で我が身を飾つてはいるではないか。これを聞いてあなたの心は震えないのか。あなたの心は恐れおののかないのか。あなたが墮落をもたらす衣服によって我が身を飾らないために、また、世俗の食物や飲物ではなく修道士の食物を食べるためには、心穏やかな人「キリスト」は苦しみを受けられた。自らを磔にかけられた主は、いま、あなたが耳を傾けることを面倒がり、ぜい沢に暮し、衣服で身を飾り、笑つてはいるあなたの全ゆる怠慢に対しての教訓を搜しておられる。あの偉大で恐ろしい日「最後の審判の日」がやつて來た時、あなたは火の中で泣き続け、自分の心の動きがそれないことを嘆くことであろう、と。新神学者・聖シメオンもこれについて語つてはいる。多情で罪深い我々は、りつぱんで称讃に倣するものを捨て、修道院にやつてきた。しかし、我々は、きれいな衣服を好み、装飾のついた服、幅広い皮のベルト、脚絆、短靴、ショール、甘い菓子や食物、リンゴやおいしい果物

を好む。そして、それらを好むゆえに、我々は、どこからみても主なるキリストから遠ざかり、彼の敵になつてゐる、と。聖なる父達も語つてゐる。邪な魔は、修道士の衣服をよく見てくる。

（2）第七回聖金地公会（公会議）。七八七年にニケーハで開催された。
『Краткая редакция』 стр. 120, И. У. Будовниц, Монастыри на Руси, стр. 244-5)。

送つてきた金持ちと一緒に裁かれるであろうと。このため、我々は非常な強さでもつて金銭欲、飾つた衣服、余分な物をもちたいという気持を抑えるように努めよう。そして、富をもたないだけでなく、それを望むことさえしないように努めよう。
「そればかりか、眼の前に絶えず死の突然の襲来を考えておきなさい。我々の主が不意に来られた時、主は、金銭を好み、物を好みことによつて汚れた我々の心を見い出し、福音書の中で金持ちに語つたことを我々に言わることがないようにである。「愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちに取り去られるであろう。そうしたら、あなたが用意したものは、誰れのものになるのか」と。このために、我々の全ての聖なる教父達は、心を一つにして我々に次のことを教えていた。すなわち、謙遜と自己反省を生み出す財産の非所有を誰れであれ全うしようとして不完全に終ることのないよう、善行を行うための固い基礎を定めることを教えた。
そして、これらのこととは昔の話であるだけでなく、今日でも真実である。

註

(1) 本章も、第二章と同様、拡大版の『修道院規則』・簡素版(三)

(3) ナジアンゾスのグレゴリオス(331-390頃-389/90)のこと。「カッパドキアの三つの星」と称された神学者のうちの一人。

(4) イサイア(390頃没)。キエフのペチエルスキイ修道院で剃髪。一〇七八年にロストフ主教となる。

(5) サーヴァ(生没年不詳)。トヴェーリのサーヴァ修道院の院長。

(6) ルカ伝 十一一一〇

第五章 《聖なるイコンと書物について、それを

いかに所有すべきかという神の書からの話》
聖なるイコンと書物について、これらをどのようにもてばよいかを語そう。

聖なる父達の神の書はこのことについて次のように語つている。師父フョードル・フェレムスキイは、三冊の良い書物をもつていた。彼は、マカーリーにこのことを伝えて語つた。「私はそれらの書物から益を受けている。そして、仲間の修道士達はそれらを手に入れ、それから益を受けている。それらの書物について私はどうすればよいのか。私に教えて下さる」。その長老は語つた。

「書物は良いものだ。しかし、何も物をもたないこと（нестяжа́тие）は、全てに優さつてゐる」と。師父エヴァグリエは言つた。ある修道士は一冊の福音書を持っていた。それを売り、「その代金を」貧しい人々に与えて言つた。「自分の持物を売り、貧しい人々に与えるようにとのこの福音書自身が絶えず私に語りかけるので、私はこれを売つたのである。」

ある修道士は、師父セラピオンに尋ねて言つた。「どのようにすれば救われるのか私に話をして下さい」と。その長老は彼に言つた。「私は、あなたに何を言うことがあろう。なぜなら、あなたは寡婦や孤児に与えるべきものをもつてゐる。そして、それを小窓に置いているではないか」と。つまり、その長老は、彼の僧房に多くの書物があるのを見ていたからである。ある修道士は、師父ピーメンに尋ねて言つた。「私は共住生活を送りたい」と。

その長老は言つた。「もし、あなたが共住生活を送りたいなら、あらゆるもの捨てなさい。一つの茶碗さえ自分のものと言つてはいけない。そのようにすれば、心安らかに共住生活を送ることができるだろう」と。大バシリオスも同じことを言つてゐる。⁽¹⁾ 共住修道院に住む修道士にとって、自分の所有物をもつことはふさわしいことではなく、あらゆる私有財産から自由であらねばならない。と。共住生活において、多かれ少なかれ、何か自分のものを持つてゐる者は、神の教会を自分から疎遠のものとし、主の愛をもつてゐる者には、神の教えを軽んじて私有財産をもつ多くの人々と共に暮らすよりも、少数だが教えを守る人々と共に暮らす方がよいと言わわれてゐる。

聖なる修道士の服を着せられて、共住修道院に住む者は、何事についても、「あなたの」とか、「私の」とか、あるいは、「といつの」とか、「あいつの」という言葉を「言つてはいけない」。もし、毒麦の種を播きながら、そのようなことを利口振つて言つている者がいるとすれば、そのような者を共住生活者と呼ぶにふさわしくない。彼らは、聖遺物窃盜者、あらゆる邪悪と欺瞞に満ちた邪惡な集団である。このように、全ての物を共有するゆえに、共住生活と呼ばれる。

共住生活の規則に書かれているように、決して私有財産を準備してはいけないし、あるものを隠しておいたりしてはいけない。また、修道士達にとつて害となつたり、救われるべき人々に悪い手本となつたりしてはいけない。だれであれ、神への畏敬の念と聖靈の掟を軽んじて、何らかの私有財産をもとうとするそのような者は、物欲と財産に服従してしまつたのである。そのような者は、二人、または、三人が、キリストの名によつて集まつてゐる所には、キリストもその中にいる⁽²⁾、とあるのと逆に、彼らはキリストの名によつて集められた人々を靈的にも肉体的にも慰めて下さる神を信じない不信仰のしるしを自らにもたらすものである。我々に必要なものは何も少くなりはしない。なぜなら、キリストが我々を教え導いてくれてゐるからである。もしかりに、少なくなるなら、それは、我々が試されているのだ。キリストとの交わりを止め、あらゆる世俗の物で富み、それと共に裁かれるよりも、貧しいが、キリストと共にいる方が良い。我々の主、イエスに暮らす方がよいと言わわれてゐる。私について来たいと思

うものは、自分の十字架をとり、私に従え、と。さらに、だれでも自分の全てのものを捨てない者は、私の弟子にはなれない。⁽³⁾ 全てを捨てた我々も、また、無意識の願いにより自分を誘惑し、物を集めることに慰めと安らぎを期待している。

たとえ、我々が、偉大で称讃に値するもの、つまり、父や母や愛する友人を捨て、そして、この世との世の美しく甘美なるもの捨てたとしても、我々は愚かさのゆえに次のことを悩んでいる。すなわち、我々は悲嘆と不幸の中にいることになり、ライオンや蛇と戦うように、日夜、肉体的苦悩と戦い、いつも死を味わっていることになるのではないか、と。くだらない物、何もとるに足らない物によって我が身を縛ってしまうことにより、この世では良心の重荷により滅され、あの世において神の恩寵の代わりに、神の怒りをうけることになる。

もし、ある者が、聖なるイコンと書物は单なる物ではない。それゆえ、私有財産をもたないことを主張する者（нестяжатели）も、自分の聖なるイコンと書物をもっても良いと言うとしよう。もしそうであるのなら、大マカーリーは、聖フョードルに何ももたないことは何物にもまして良いことであるとは言わなかつただろう。また、例の修道士は、聖なる福音書を売り、そのお金を見付けていた人々に与えなかつただろうし、大セラピオンは、多くの書物をもつてゐるあの修道士を非難しなかつたであらうに。其住生活において私有財産をもたないことを彼らは何よりも優先してきた。それだけでなく、彼らは、多くの、しかも、大いに必要な物が差し迫つてゐる荒野 *пустыни* に住んでいたことを考えてみなさい。

果して、彼らは、荒野で書物をもたなかつたのだろうか。彼らはもつていた。しかし、それは自分のものではなかつた。師父ピヨートル・ダマスキン⁽⁶⁾が証言し次のように言つてゐる。私は自分の書物を一度も持つたことはない。しかし、キリストを愛する人々から借り、それを読み、そして、その後返した、と。共住生活においては、いかなる必要性にもせまられず、キリストの恩恵により、キリストのしもべ達はいつもまつたくおびただしい豊かさの中で暮している。

このため、偽わりなく、世俗の生活を捨てた者はだれであれ、主の教えに逆らう道を進むような者になつてはいけない。そうではなく、広い道より狭い道を、富より貧困を、名譽より不名譽を、この世の喜びよりもひどい苦しみを好むような者になるがよい。そうすれば、この世の生活において生命の光によつて照らされ、あの世において生命と光であるキリストがおられる不滅の王国を受け継ぐであろう。理性をもつてゐる者にとって、この世に存在するものの内で、キリスト以上に好ましく清いものはない。

これらのことは昔の話であるだけでなく、今日でも真実である。

（次回に続く）

註

（1）マカーリー、エヴァグリエ、ピーメンの言葉の引用について、ルリエーは、修道士の完全な私有財産の禁止を指摘し、ネスチャジャーチェリの指導者ニル・ソルスキイの教えとの類似点を見い出した。そして、修道院の「共住生活」の原則は、ここでは、完全な非所有の原則と一致していると述べている

(Я. С. Лурье, «Краткая редакция» стр. 121, 125)。これに対し、カザローグトは、トーシフヒルの私有財産の禁止についての原眼には、基本的姿勢に違ひがあると言を指摘し、ルリエーの見解を批判した (Н. А. Казакова, Очерки по истории русской общественной мысли—первая треть XVI века, Л., 1970, стр. 63-67)。なお、詳しく述べ、「修道院規則」・簡素版 (一) 図八一一六ページを参照。

- (2) マタイ伝 十八一一〇
- (3) マタイ伝 十六一一四、ルカ伝 九一一一
- (4) ルカ伝 十五一一六
- (5) フルシチヨフによるこの説は、Н.Н.М.・シリンの著作からの引用である。なお、出典は不明 (И.Хрущов, Исследование, стр. 76)。
- (6) ペトロス 八世紀半のダマスコ同教。ダマスコの聖ヨハネの著作に大きな影響を与えた。
- (7) この部分は、共住生活を行う修道士の恵まれた生活について語られていると考えられる。修道士の私有財産の所有は厳しく禁止されているが、その反面、豊かな共有財産を所有していることがうかがえる。